

いつか世界を変える力になる

JICA 海外協力隊

連携派遣のご案内

JICA海外協力隊
(連携派遣)は、開発途上国の
支援活動を目的として、
民間企業、自治体、大学等からの
ご提案(派遣国・活動内容など)
により、社員、職員、学生等を
JICA海外協力隊として
派遣する制度です。



各種お問い合わせ窓口のご案内

グローバルな事業展開の可能性、人材育成、組織としての
社会貢献活動などに、連携派遣が活用されています。

JICA 海外協力隊
連携派遣について



お問い合わせ
国内窓口



団体の力を、JICAと共に世界へ。

JICA海外協力隊(連携派遣)は、
団体が主体となり、途上国へ人を派遣する仕組みです。

JICA 海外協力隊（連携派遣）は、個人が主体となり応募する通常の派遣とは異なり、国内の団体が JICA との合意に基づき団体の関係者を JICA 海外協力隊として派遣する制度です。

JICA 海外協力隊の参加を通して得られるさまざまな経験が人材育成に活用されています。

連携派遣のメリット

① グローバル人材の育成

開発途上国で現地の人々と共に取り組む活動を通じ、グローバルな視野、企画力、精神力、語学力、コミュニケーション力等を培った経験者は、グローバル人材として様々な分野で活躍しています。

② グローバルな事業展開の可能性

本連携派遣を通じ、派遣国との接点が形成され、今後の海外展開の礎となります。また、JICA との関係構築により、JICA 内外の他のスキームとも連携した新たな海外展開も期待されます。組織としての社会貢献活動にも繋がります。

③ 団体のニーズに基づく提案

JICA の各国の協力方針等に沿い、各団体のニーズに基づく提案を検討いただけます。

④ サポート体制と経費支援

語学学習を中心とした訓練、渡航費用や現地での活動・生活にかかる経費、また安全面・健康面のサポートを JICA から提供・支援します。



JICA 海外協力隊(連携派遣)の目的

国内の多様なパートナーの強みと、JICA が持つ開発途上国とのネットワークをかけあわせ、より効率的に以下の JICA 海外協力隊事業の目的の実現を目指します。

開発途上国の経済・社会の
発展復興への寄与



団体の強みや特徴を生かし、世界の課題解決に貢献。

異文化社会における
相互理解の深化と共生



現地の人々や機関との対話と協働を通じた社会的価値の共創。

ボランティア経験の
社会還元



派遣で得た知見やネットワークの、団体での事業や、地域社会への活用。

専門性を、世界の現場へ。

団体の強みを活かして
世界の現場で活動

連携派遣は、幅広い団体・組織が応募できます。

さまざまな組織がこの制度を活用し、国際協力に参加しています。

“団体ならではの強み”を活かした提案をお待ちしています。



応募できる団体等

自治体・行政機関



大学・教育機関



企業・業界団体



NPO/NGO



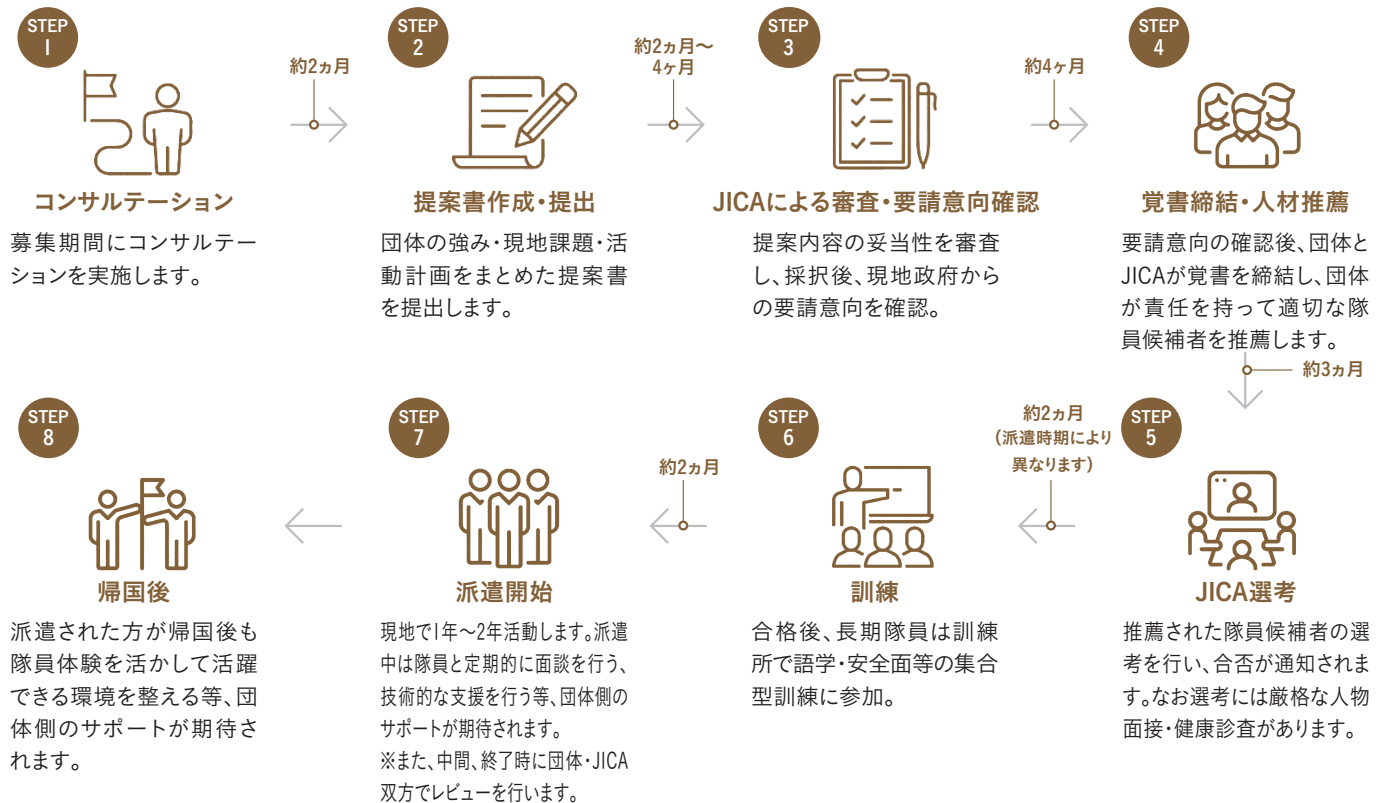
など、日本国登記法人格を有する団体が対象です。

また、募集期応募締切日時時点で設立後2年以上経過していること、外国会社等に該当しないこと等が応募条件となります。

複数の団体がお互いの強みを持ち寄って行う
「共同提案」も可能です。



案件応募から派遣後までの流れ



JICAのサポート体制

派遣される団体関係者の方は、派遣前・派遣中にJICAのサポートを受けられます。

派遣者が最大限のパフォーマンスを発揮できるよう、団体側からも定期的な面談や技術的指導等、派遣される方へのサポートが期待されますが、JICAは以下のサポートを提供します。

JICAによる主なサポート

派遣前訓練



長期派遣者(1年以上)を対象に、派遣前に合宿形式の訓練が実施されます。

期間:約73日間。

場所:JICA二本松青年海外協力隊訓練所(福島県)またはJICA駒ヶ根青年海外協力隊訓練所(長野県)。

内容:JICA海外協力隊の基礎/語学訓練/健康・安全管理/異文化理解/協力活動(所外活動)。

JICAによる経費負担



派遣にかかる経費は、一般派遣同様にJICAが負担します。(ただし短期隊員については団体側で一部負担)

長期派遣(1〜2年):往復航空賃や現地での生活費など、派遣にかかる経費はJICAが全額負担します。

短期派遣(1ヶ月〜1年未満):往復航空賃の一部(上限15万円/人)団体側負担・一部経費支給対象外。

在外事務所の支援



在外事務所にボランティア事業担当者が配置されており、生活・活動上の問題の対応などを支援します。

安全管理



安全管理担当者の配置:在外事務所に安全管理スタッフを配置し、治安情報・行動規範の提供、緊急時の安否確認、住居の安全確認等を実施。万一の情勢悪化時には緊急退避を支援。

通信手段の確保:現地での通信環境を整備。

健康管理



健康管理担当者の配置(在外健康管理員):隊員の健康管理に関する相談窓口となり、日常的なアドバイスを行います。

現地顧問医:傷病が発生した際、現地の適切な医療機関で受診できるよう体制が整えられています。

医療情報の提供:現地の医療事情(病院の設備や流行している病気など)を調査し、隊員へ適切な情報提供を行います。

緊急移送:万が一現地では対応できない重篤な傷病や事故が発生した場合、契約している保険会社を通して、医療体制が整った都市や国へ移送します。

次は、あなたの団体から。

団体の強みを活かした提案で国際貢献を実現

現地ニーズを丁寧に把握し、団体だからこそ提供できる価値を明確に示すことが、提案のポイントです。また、一般公募では確保が難しい希少職種への提案は、現地からの期待も高く、採択への大きな鍵となります。



農業・畜産・水産業



地域産業の発展や技術向上に貢献。

職業訓練



若者の雇用促進・産業基盤の強化に寄与。

日本語教育



教育機関や日本語学習者の支援を通じ文化交流を促進。

初等・理科・幼児教育



教育環境の改善、学びの質向上に貢献。

JICAが重視する重点分野(教育・農業・職業訓練・日本語教育など)に一致する提案をより重視します。

連携派遣の提案のポイント

提案は、「現地の課題やニーズ」と「団体が連携派遣に参加する目的や連携派遣を通じて実現する目標」がしっかりつながっていることがポイントです。

ポイントは右記に示されたように、現地の課題と団体の強みにマッチしたもので、実現可能な解決までのストーリーが描かれていることが重要です。

- ✓ 現地の公的機関と実現可能な協働体制がすでにある
- ✓ 現地の課題が明確であり、団体の経験・実績・専門性を活かした解決方法が示されている
- ✓ 複数回派遣など、継続的な取り組みが見込める
- ✓ 団体内での隊員の支援体制(担当部署等)が確立している
- ✓ 派遣中および後に、団体がどのように隊員として派遣された方を支援するか、具体的に計画されている
- ✓ 連携派遣に関する情報発信(広報)が、定期的に行われるよう計画されている

あなたの団体はどの分野？

本パンフレット裏面から始まるインタビューには、さまざまな団体の所属先担当者・派遣者インタビューが掲載されています。

CASE 01 — 自治体

沖縄県教育庁
教員を派遣



途絶えかけたボリビアへの派遣。JICAと共に繋ぎ直した絆を次世代へ。

CASE 02 — 大学

帯広畜産大学
学生を派遣



大学の専門性とJICAのミッションが合致した必然の出会い

CASE 03 — 民間企業

三幸学園
職員を派遣



連携派遣を「社会貢献」としてだけでなく、人材マネジメントとして戦略的に活用。

団体インタビューは本誌裏面より読みください。

裏面へ ➡



CASE 03 三幸学園 —職員派遣のケース—

「誰かのために」が職員を成長させる。
タイの福祉現場で再確認した、
人と関わり合うことの根源的な価値

— 連携派遣は、教職員の可能性を最大限に引き出すしくみ



言葉の壁を超え人と深く関わることで、
自分自身の新たな在り方を
知ることができた。

三幸学園 教職員 池内亜美さん



バンコク近郊の、国内でも人口の多いエリアで、障害児の保護やリハビリを目的とする保護施設に派遣されて一年あまりです(※)。タイでは「障害児」とは「7〜18歳」とされているものの、入所する約300人のうちその対象者は全体の1/3ほど。行き場を失った18歳以上の障害者も受け入れているのが実情です。

障害の程度も、肢体不自由や、知的障害など、中重度の障害の方が多くいらっしゃいます。

生活の隅々まで仏教文化が根付いているこの国では、「家族が診る文化」が普通の認識としてあり、福祉を国や行政のレベルで支えていくには、法的にも未だ途上。だからこそ保護施設が福祉的な役割も担わざるを得ないのは、必然と言えるかもしれません。

派遣前、私は三幸学園でスポーツトレーナー・インストラクターをめざす日本の学生を養成する役割を担っていました。初めはイメージだけで将来を思い描く学生が、次第に自分に足りないことを理解し葛藤しながらも、「自分でできること」を見つけていく。そんな育成に関わる仕事に醍醐味を感じていました。

そして応募した職場内でのJICA海外協力隊(連携派遣)。派遣先では同僚たちはもちろん、子どもたちも言葉の壁に関係なく、あたたかく私を受け入れてくれました。自分か



子どもたちの明るいエネルギーに包まれながら、日々奮闘中です！

らも挨拶は欠かさないように心がけ、タイ語で返してみればとても喜ばれたり。JICA事務所の方々も、いつも気にかけてくださる(※1)のでも感謝しています。

人は「人と関わること」が何より大事、ですね。相手の事はもちろん、自分自身気づいていなかった自分の考え方、在り方も改めて知事ができる。

タイは仏教の教えから「徳を積む」習慣も広く根付いている国でもあるんです。富裕層を中心に、障害者をはじめとする社会的弱者の方を対象とするイベントが頻繁に企画されます。そうしたタイならではのネットワークを活かして、障害児の一人ひとりが少しでもできることを増やし、施設での暮らしが豊かになることを願って、社会との接点、自立につながるアクティビティや制作物づくりに奔走する毎日です。まだ活動は道半ばですが、応募して本当によかった、と思っています！

派遣者所属先
担当者

連携派遣は、将来的な事業発展につながるコネクションを
現地で構築できるチャンス

三幸学園 人材開発グループ 上田 将道さん



医療、スポーツ、美容、保育、ブライダル、製菓、調理、ITに至るまで幅広く教育機会を提供している当学園が事業を拡大していくためには、「教職員一人ひとりの可能性を最大限引き出すしくみづくり」が何より大切です。

そんななか、連携派遣の取り組みを始めたのは4年前。

当学園で教職員を選抜後、JICAに対して推薦する(※2)わけですが、連携派遣の取り組みは「グローバル人材の育成」という当学園の目標とも非常に親和性が高く、JICAによる派遣前訓練を通じて客観的な評価をしてもらえるのは大きなメリット(※3)と感じています。

実際に現地へ教職員が派遣されてから半年は、JICA海外協力隊のミッション達成に集中してもらい、その後は当学園としての目標設定についても並行して実行に移してもらった、というプロセスを経るようにしています。

というのも、当学園としては、連携派遣は将来的に事業の発展につながるようなコネクションを現地で構築できるチャンス(※3)とも捉えているのです。

このことは連携派遣後に「本人のキャリアプラン」を充足させていくためにも、とても重要だと考えています。どうしても派遣中は現地の活動に意識も労力も消費せざるを得ない日々が続きます。所属先の動向は後回しになり、人によっては孤独になってしまうリスクも



教育分野で多岐にわたる事業展開をする三幸学園。「将来的に派遣国と事業展開する際の繋がりが構築できるのもメリットのひとつです。」

※池内さんは、障がいのある子どもたちの成長を支えるアクティビティの企画・実施や、子どもたちが訓練を兼ね制作する製品の改善提案・商品開発に取り組んでいる。

※1 JICAによる主なサポート(詳細はP4) / ※2 案件応募から派遣までの流れ(詳細はP3) / ※3 連携派遣のメリット(詳細はP2)



CASE 02 帯広畜産大学 ―学生派遣のケース―

「数字」で築く酪農の未来。 パラグアイの現場と十勝を結ぶ、 技術と信頼の架け橋

― 若き学生の挑戦を通し、大学としての使命を実現



確実なデータの蓄積と運用で 現地の生産性を向上し 国境を越えた「信頼」につなげる

北海道国立大学機構 帯広畜産大学 真下 陸さん



現在、私が赴任しているのはパラグアイの地方にある、ナランヒート農協。ブラジル人とパラグアイ人の2人の獣医とともに、「普及員」として数軒の酪農家に、日々通い続けています。

日常会話レベルのスペイン語はなんとか大丈夫なのですが、畜産に関する専門用語をもとに具体的な説明が必要なときは、事前に獣医たちと意見交換した上で酪農家の元を訪ねるようにしています。伝えるべき内容を原稿におこしておくなど、事前の準備を念にしておくことも当然ですね。

牛が乳房炎にかかることなく、質の良い生乳を生産するには、乳房を常に清潔にすることが大切です。ここパラグアイではその重要性を酪農家の方々に指導しながら、乳房炎の診断を搾乳時に行い、早期発見することで早期治療・搾乳方法の改善をサポート。牛たちの健康は酪農家の収益に直結するので、経営を下支えする、という意味で責任ある任務です。ひとときも気は抜けません。

日々の仕事は至って地道なものです。獣医をはじめ周囲の方々に改善案を持って巻き込み、助言をもらいながら活動を広げようとしています。JICAの事務所にも定期的な報告書を提出し、的確なアドバイスをもとに次のアクションを練り直します。



パラグアイの広大なフィールドが私の仕事場。トラクターのエンジン音を聞きながら、今日も酪農家さんを巡ります。

パラグアイは開発途上国でもあり経済格差もありますが、乳価自体は微増を続けていて、消費の後押しもあり、事業としては比較的順調と言われています。

ただ農村から都会に出ていく若者も大勢おり、後継問題は日本と同じようにあります。乳牛生産の体制もまだ途上。未だに手絞りの小規模農家がいる一方、日本の先端酪農家と同等水準の搾乳機や衛生管理を誇る大規模農事法人もあり、その格差も大きい。だからこそ自分は「データの蓄積と分析によるエビデンスをもとに、旧来のカンや自然任せではなく「数字」で乳牛管理の技術を向上させる必要性を、とくに小規模経営の酪農家に伝えたい。

将来は、畜産の専門家として開発途上国の発展に貢献したいと思っています。そのためにもっとも大切なのは、国境を越えた確実な「信頼」を得ること。そう確信しています。

派遣者所属先 担当者

学生が日々の学びを実践し、 悩み成長できる場所

北海道国立大学機構 帯広畜産大学 国際地域連携課 大橋 朋広さん



東京ドーム約39個分という広大なキャンパスの一角にある研究棟で、現在派遣中の真下さんは乳牛の繁殖学を極めようと勉強していました。真下さんは、向上心、コミュニケーション能力とも高い。大学を代表する派遣人材として、安心できる学生のひとりです。

2004年に日本の大学として初めてJICAとの包括連携協定を締結し、国際活動を推進しています。そのひとつにJICA海外協力隊・連携派遣があり、初期はフィリピン、現在は、パラグアイで活動しています。

パラグアイは1936年に最初の移民が入植し、多くの日系移民がいっしょに暮らす国。本学の在学学生、卒業生の中にも日系移民のご子息の方がいます。日系移民の方が築かれた日本人に対する信頼が培われる同国において、パラグアイだけでなく、昔ながらの日本文化に触れられることは、他の開発途上国とは異なる深い学びがあると考えています。

一方、「技術」という面で考えると、短期派遣の学生は専門分野について知識が乏しいところが当然あります。そのため本学では、教員で構成される「ボランティア支援委員会」を設置しています。スペイン語の研修では、パラグアイ人の教員が酪農家役をし、学生とやり取りをすることも。派遣中は教員が同行し、現場で起こっている事柄についても支援しています。



十勝の雪の中で磨いた技術が、パラグアイの太陽の下で実を結ぶ。その架け橋であり続けることが、私たちの使命です。



CASE 01 沖縄県教育庁 —教員派遣のケース—

海を越えて七十年、 ボリビアの地に息づく「沖縄の心」を 次世代へ繋ぐ架け橋。

— JICA海外協力隊(連携派遣)がもたらす、島人のアイデンティティ継承と教育の原点。



連携派遣で訪ねた「もうひとつの故郷」。 互いの歴史と文化を伝えあう 架け橋になりたい。

沖縄県 小学校教諭 古見 優奈さん



切です。ボリビアの先生と日本での授業の組み立て方や進め方、子どもたちとの接し方について意見交換することもあります。

日本語学習のほかに、エイサー(沖縄に伝わる踊り)や三線(さんしん)など、沖縄文化を教えるのもミッションのひとつ。コミュニティではお祭りことも多いので、そうした機会の運営にも関わりながら、故郷の文化の継承のお手伝いをしています。

日本で教員になってからしばらくは、毎日多くの仕事に追われて、ゆっくり考える時間もなくありませんでした。もうひとつの故郷、ここ「オキナワ」では、失敗してもやり直せる。まわりの人たちがずっと見守ってくれる安心感があります。

帰国後は沖縄の子どもたちに、かつて移民の歴史があったこと、海の向こうで同じアイデンティティを持つ仲間がいて、つながっていることを伝えていく架け橋になりたいですね。



失敗してもやり直せる。そんな安心感を与える同僚たち。ここでの出会いと経験は、「もうひとつの故郷」がくれた一生の宝物です。

派遣者所属先
担当者

異国での挑戦は、教員にとって グローバルな視点を 獲得する貴重な経験。

沖縄県教育庁 学校人事課 県立学校人事班 安次富 盛之さん



です。

ただ、連携派遣を通じて開発途上国の課題解決に携わること、は、派遣教員にとってグローバルな視点を獲得する貴重な経験。人間的な成長にも眩しいものがあります。派遣された教員がボリビアから持ち帰ってくる経験は、沖縄の子どもたちにとって、もかけがえのないものにもなっていることが「還元活動」でも証明され、関係者の誰もがその価値を認めているところです。

古見さんのように、真摯に子どもたちと向き合い、沖縄の未来を見据えて日々健闘してくれている若い力はとても貴重な存在。沖縄と世界との橋渡しを通じて、未来の沖縄を支えてくれる人をひとりでも多く輩出できる環境づくりを続けるためにも、教員不足を理由に、本事業への参加継続をあきらめてはならない、と考えています。



異国での挑戦は、教員にとってグローバルな視点を獲得する貴重な経験

「コロナ・オキナワ」の入り口では、「めんそーれ!」と平仮名で書かれた看板が私を出迎えてくれました。

平日の午前中、学校ではボリビアの指導要綱に沿った授業がボリビア人の先生によって運営されます。午後の3時間は補習的な位置づけで、私の受け持ちは日本語の授業。

日系の方々が多くいらっしゃるコミュニティなので日本語もある程度交わされています。ただそのような環境ですが、確かな文法や微妙なニュアンスの使い分け、また沖縄の方言と標準語でも使い分けはあり、そうした細やかな部分を伝えてあげるのが何より大

USER INTERVIEW

連携派遣をお考えの担当者様必見！ 代表的事例を紹介しています。

互いの歴史と、文化の架け橋

P1.
CASE 01
沖縄県教育庁
— 教員派遣 —
派遣国: ボリビア

行ったのはこの国!

派遣者 沖縄県 小学校教諭 古見 優奈さん

派遣元 担当 沖縄県教育庁 学校人事課 県立学校人事班 安次富 盛之さん

異国での学びは教員の貴重な経験

国境を越えた信頼

P3.
CASE 02
帯広畜産大学
— 学生派遣 —
派遣国: パラグアイ

行ったのはこの国!

派遣者 北海道国立大学機構 帯広畜産大学 真下 陸さん

派遣元 担当 北海道国立大学機構 帯広畜産大学 国際・地域連携課 大橋 朋広さん

学びを実践し、学生は悩み成長する。

言葉の壁をこえて

P5.
CASE 03
三幸学園
— 職員派遣 —
派遣国: タイ

行ったのはこの国!

派遣者 三幸学園 教職員 池内 亜美さん

派遣元 担当 三幸学園 人財部 人材開発グループ 上田 将道さん

将来の事業に向けた人脈構築のチャンスに